

土屋 正義 編輯

繪本石山軍記

二

箱
4遠
2260
2



遠14
2269
2

石山軍記初篇卷之二

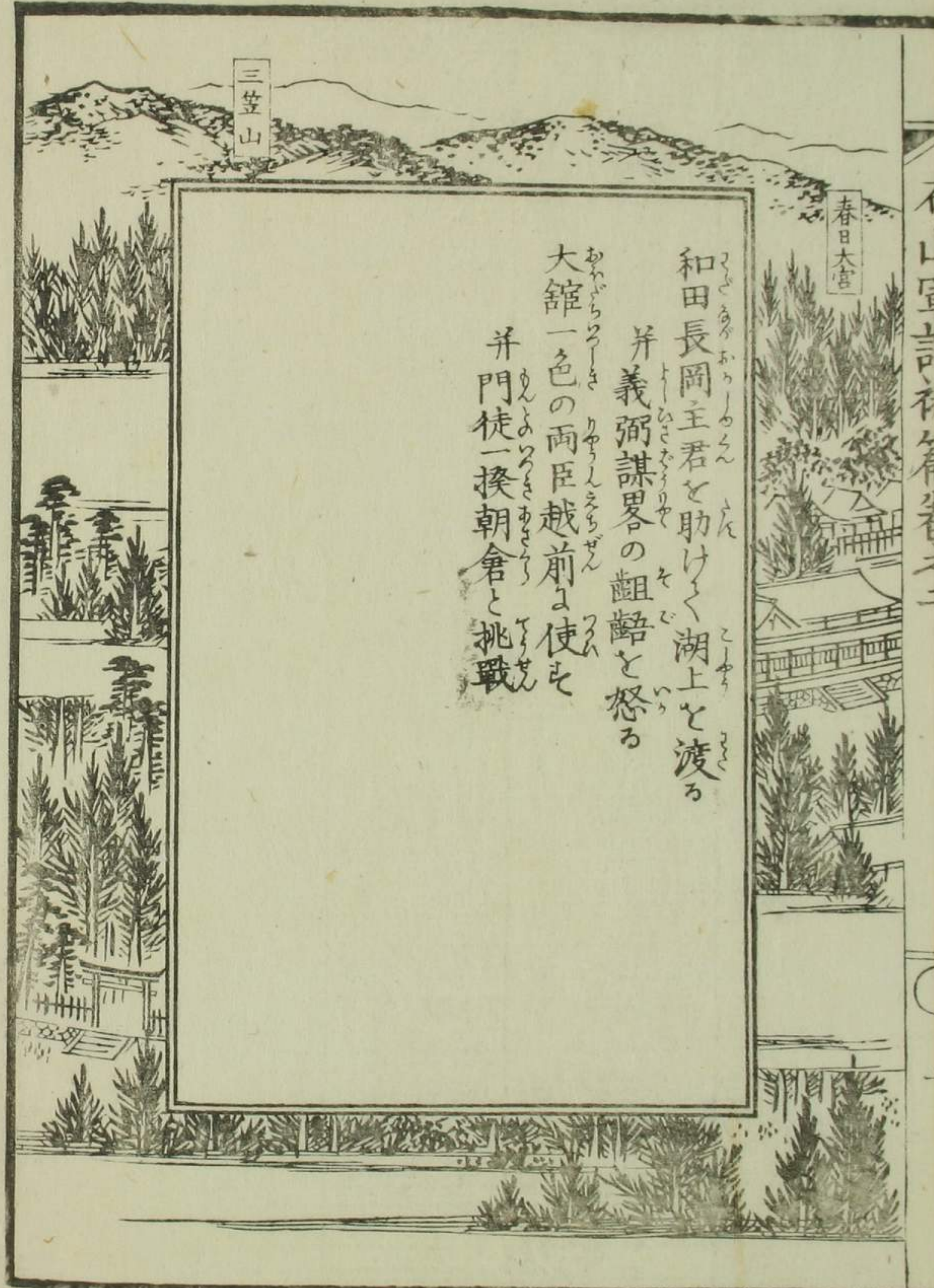


繪本石山軍記初篇卷之二

目錄

- 覺慶得業南都と御落去
- 并春日の神鹿主從と導く
- 三好松永確執泉州堺と戦ふ
- 并阿波御所義榮上洛
- 佐々木父子逆臣と属して主君を欺く
- 并新公方家箕作へ渡御

目二



和田長岡主君を助けく湖上と渡る
并義弼謀畧の齟齬と怒る
大館一色の両臣越前へ使を
并門徒一揆朝倉と挑戦

繪本石山軍記初編卷之二

土屋正義 編輯



覺慶得業南都と御落去并春日神鹿主從と導く
前將軍贈大相國義晴の御子嫡男義輝御當將將二男ハ覺慶とく南都一
乘院の門主と成らせぬハ三男ハ周髡と号し洛北鹿苑寺小喝食ふく御座
々々御母公慶壽院大禪定尼明室昌ハ近衛関白藤政家公の御娘なり昨日
室町の御所ふ於く義輝將軍と俱み身没らせぬハ三好松永ハ思ひの儘本
意と達し惡逆尚も重疊しこの連枝の方々とも失ひ参ら白むびてハ心安
く評議一決し翌日九日小平田和泉守と討手と北山鹿苑寺小差
むむ方便出し奉り惠比須川あく情あくも討てまる小川の住人美濃

屋小四郎御輿近く供奉しつゝ平田和泉守と直地ふ討果し其身も
 共ふ討死を周高侍者今年十六歳傷まりあんど言づるに「爰ふ長岡
 兵部大輔藤孝は此事とまづく嘆き南都ふましまし覺慶得業と如
 何ともして助け奉つて思ひ種々と工夫と廻らむ撰州石山
 の本願寺へ三好三人衆へ大檀越といひ殊ふ當住光佐上人如と信仰する
 他ふ超々まづ藤孝石山へ参向し上人の慈悲と請ひまづ上人より三人
 衆へ様々利害と説き程ふ覺慶得業と助くまづ評定決せしと松
 永因く大ふ怒り如何なる佛も悔ませ正しく凡の仇あまば打捨おく
 べしと思ふべし是れは大事の難とびつゝ法師の言條と信じ
 緩急ふあを思ふ無益の長評定ふ時とつゝ取道し奉つて後り

悔とも甲斐ありとと兵士と追々南都ふ走らせ一乘院の四面と囲む
 と固め生捕進らせんと然れども評議一決せざば理不盡ふ打もつと
 唯嚴ふ守護しつゝ三人衆と松永と問答數ありつゝ其了簡雙方異ふ
 して合さざる終ふ是より不快の中となりあま去程ふ長岡藤孝は此評
 定の間とつゝ暗ふ南都へ書翰と通す一五十一と言上つてふ討手
 と差向べし御不例のう偽らせあり醫師とまづせ謀と廻し
 囲むと出し奉ると告げり覺慶大ふ驚き給ひ凡將軍の横死母の
 御條周高侍者の凶變聞しめせ悲ふ應く御身の上ぞと思召
 する殊更ふ安と御心もまづまづ縦令出家の身なりとも正しく凡將
 軍あま御母公周高侍者の怨敵なり是と討く孝艱ふあま修羅の

くまのやちうり
覺慶藤孝ふ
すくまて虎と
救ふ給ふ
のがふ



くまのやちうり
覺慶得業の
義輝將軍の
御舎弟
を天文
六年十一
月三日
誕生
ゆい今
永禄八

年の九
歳ふ
あふと云
一説
藤孝
朝臣の
得業
別腰の
御舎兄
みく聴
明徹智
文武の
連世小
甲
坐せ云

石山皇言不立有卷之二



苦患くわんと免まぬきあつてあつて方便ほうべんとあつて止とどめて非ひど思おも召め立たせぬ藤ふじ孝こうの
 言ことと謀まふ随まひ御ご不ふ例れいのごと偽いつはりら給たまひく寝ね卧を安やすらざる御ご氣き色いろと
 ならぬ是これによろく藤ふじ孝こうの計はかりらるて聽きて米こめ田で壹ひと收と守まもり宗そう賢けんとらふ
 名な醫い武ぶ功こうの者ものと参まりて則すなはち藥くすりと進すすりて即すなはち時とき小こ御ご快かい氣きあせらるまし
 趣おもむきと告つあせ寺てら内うちらる此こ喜よろこ悦びと酒さけとらしし介せ後ご辻つの番ばん兵へい
 まづぐも寺てら内うちより酒さけと贈たまはると進すすむも小こ士し卒そつ小こ只ただ管くだうらむもび
 終おひ日ひ酒さけ宴えんに真まことらる日ひ己おのれ小こ暮くれらる時ときをよろき倡しょう出でるもと乳ち
 母はは一人ひとりと供ともり宗そう賢けん附つ添そひ奉ほうりて寺てら内うちと恐おそび出でるもと長なが岡おか藤ふじ孝こう馳ち
 参まり春はる日ひ山やまはかりらる主しゅ從じゆ四よ個こ間ま路ぢとたどり近あ江え路ぢ差さて急いそぐもと
 頃ころの五月ご九く三日さんの事ことあらむ月つきまづ出でるもと路ぢ見みぬもと木きの梢さかと分わ過へて葛くわの

藪やぶと攀のぼ通とほの嶺ねを幸ゆかて上のぼりて上のぼりて実まや假かり初はつの御ご遊ゆうも乘のり輿こし小こと召め
 まづ終おひ歩あ行ゆ跣はだかゆき歩あみま馴なれ給はる袖そで小こ泪なみだと止とどめ裳もと草くさ露つゆ
 小こ浸ひみ哀あれまさる然しかども虎こ口くちの難がたと遁にまる鰓うの鰓うと免まぬもと御ご
 喜よろこび哀あれまさる時とき小こ未まつく左ひだりらる御ご意い定さだまるらる忽たちち道みち小こ踏ふ迷まよらぬ
 あらむもと東あ西にしと辨わかへぬ南みな北きたと分わかれぬ暫しばし木き蔭かげ小こ立た徊へひ春はる日ひ大だい明めい神しん
 小こ祈いのりて掛かけぬ靈れい驗げん忽たちち新あらくし鹿か一ひと足あし忽たちち現あらわるれ出い
 御ご前まへ小こ角かくと峙たむら居ゐるもと覺おぼ慶けい見み給たまひぬ汝なんぢ春はる日ひの御ご使しと覺おぼゆ急いそぎ道みち
 まづせいく宜よろふ時とき小こ此こ鹿か先ま小こ立た主しゅ從じゆと導みちききらる終おひ小こ本ほん路ぢ小こ出い
 あらむもと早はや東あの山やま端は小こ月つき出でて山やま谷や寂さむしくて風かぜ謐さむまりて頭あたまて里さとらる
 鶏けい鳴なむと花はな中なか小こ時ときとつげら峯かみのとき鳥とりの鳴なむもと音ね聞き之の覺おぼ慶けい

得業とりあへむ

郭公鳴也五月の山中ふをのが古巢の名残あり

斯く山路を過る給ひ近江國甲賀郡小着ぬ和田伊賀守惟政が

宅所小暫く忍びく御座る松永彈正久秀の覺慶得業と討奉

つんと勸むまども三人衆一同せむて事延引ふ及びく松永の大

怒り今の我獨り討奉ると思ひ定め討手の兵と遣りたる早

覺慶も南都小おくりまば何方へ落させぬ御行末さる

知者なりと番の兵士等迷惑せし所ありと引返り告ぐ久秀

拳と握り足摺り鳴呼此人何處へ逃去る然るに諸侯と頼

あひ母兄の仇と復し謀反の逆臣と誅せまんが爲小義兵と拳と

觸らまん小誰の背を申さる斯有バ我身の大事ありと偕も三人衆

の臆病者小引留らる自滅と招くとの口惜さりと憤まども爲方

是より倍三人衆と松永との間不快と成行る

三好松永確執泉州堺小戦ふ并阿波御所義榮上洛

五逆八逆の罪天地何ぞ其身と容神明争り家運と助々罪と擔ひて

榮花と望む志ハ唯是火中不在と涼と風と待が如し偕も松永久

秀と三人衆の間不平重り終ふ松永ハ河州の畠山次郎高政と語らひ三

人衆と討て畿内の政務と執んと思ひ立ちりふ三人衆ハ三好義継と

大將と四國の味方を集め三好山城守康長篠原右京進長房等と一

手にあり阿波の御所義榮より松永退治の御書と申下り大軍と但

一搦不搦落さんひきりことんつ斯有やど一程まふ松永ま泉州堺まの津つふ於まく三好まと合あ戦あふ及あびあるあふ松永ま戦あひ負あく信貴あ山の城あふ引退あく翌ある永禄あ九年あの春夏あ兩度あまあく泉州あふ於あて合戦あなりあくあも松永あ方敗軍あせあくあば松永あ思あふあく是あの味方あふ然あるあまあく大將あありあ故あなりあさあまあく先偽ありあて和睦あし時節あと見合あさんと同年あの冬あより種々あ扱あひあて入あるあふより三好あ松永あ和議あとのひ合戦あへ稍止あしあるあも三人衆あの奢倭あの聊あも昔あふあくあは主あ人義繼あと輕あんあド氣隨あの事あのあ多ありあくあまあく松永あ心あふ是あを悦あびあよあきあ隙あもあかあと伺あひ居ありあく爰あふ亦あ阿波あの御所あ義榮あへ去年あより上洛あの催あひ有あるあまあく三好あ松永あの取合あめあく海陸あとりあふ路次あ自由あありあるあまあく故思あひなあるあに延引あせあるあも斯有あてあ如何あとあく同年あ六月あ四国あを進發あ

給あひ淡路あふあがあ船あとありあ夫あより摂州あへ押あ入りあ十月あ下旬あ島上あ郡富あ田あの庄あ普門あ寺あふ着あせあらあるあ斯あく三人衆あの申行あふあ依あてあ十二月あ廿八日あ義榮あ從五位あ又叙あせあるあ翌ある永禄あ十年あ二月あ八日あ勅使あ普門あ寺あふ下向ありあて征夷あ大將軍あふ任あぜあれあるあ阿波あ御所あより多年あの本懐あと達あし悦あびあふ事限ありあ則あち上洛あありあく室町あの假御所あふ入御あありあるあまあく三人衆あいづあれあも義繼あと外あふあ新將軍あ家あ直あ参ありあて威あと震あひあるあ故義繼あ更あふあ心あよりあ終あふ三人衆あと不和あの色あと顯あるあまあく松永あ是あをあよありあ時節あ願あふあとあ海あの僥倖あと内あく金山あ駿河あ守あを以あてあ義繼あへ諛言あし三人衆あと亡あむあるあ由あと勸めあるあまあく義繼あは今年あ僅あふ年あ十九歳あありあて思慮あ浅あく松永あが悪計あふあ瞞あるあまあ是あふ同心あせあるあまあく永禄あ十年あ六月あより南都あ

多門山小城と築きて義継松永との小槍籠を多き三人衆大憤り
 余有る義継と松永との小討亡せしむ。新將軍より義継并ひ小
 松永追討の御教書と無躰小申下げ永禄十年十月三好日向守義興同
 下野守政康麾下城州淀の城主岩成主税助慶之木の三人衆と初め
 とて細川六郎氏元松山藏人久清中村新兵衛高次同舎弟新助高
 之等五千余騎あつて打立たる。細川六郎松山藏人の二千余人あつて松永
 の一子右衛門佐久通が籠もる。信貴山の城の押へて。残る三千余人を
 南都へ通す。十日の晩小大佛殿小宿陣を松永久秀とて夜討し
 一兵五百余人と卒し多門が城と出く亥の上刻不意小大佛殿小攻寄
 たる三好の軍勢忙しく周章防戦難儀小及ぶる上小箭火許多焼捨あり

三好方の鳥銃の薬小火うらうら折節寒風烈くして大殿講堂中門西
 門回廊小至るまで悉く火とある程小三好の敗北大なるなり。既小中村
 兄弟を討め六百余人討死し三人衆立足もあらず。匍々の体にて京都へ逃りたる
 和州筒井の城主筒井陽舜房藤原順慶大佛殿空上の條と因て大入
 悼親族山田の城主山田民部太輔藤原順貞入道道安
 の城主慈明寺左門藤原順國 和州慈明寺と 領を三千石 等と同十八日東大寺へ遣し米千
 余石と寄附せしむ。翌永禄十一年の春より道安入道自ら金銀と
 出し焼損したる釋迦の御頭と鑄懸し尊像と全くと 和州諸將軍傳ニ
 新公方家矢嶋又誓して御方と集め給ふ並佐々木逆意と企つ
 去程小松永彈正少弼久秀の益勢を得て五畿内並小紀伊の知邑右衛門

佐久通と父子合せく三十余万石と領し和州信貴山多門山の両城小
 代ぐ在住し大和と一己ふ領せんと謀り程小筒井順慶と合戦ふ及ひ
 又へ三好の三人衆も戦ひて畿内片時も静あらず百姓町人干戈小苦
 泣悲む聲耳あち浅間しり世ろぞ成り却説一乘院の覺慶得業ハ
 長岡兵部大輔藤孝が忠義ふより近江国甲賀郡矢嶋の郷小落ぬ和
 田伊賀守惟政が許ふ入御あちく蛟龍が一陽來復の時と待如く深
 く蟠つておちくくるが京都ろ三好松永確執し合戦止時をえ
 ハ御行衛をも強く尋捜を事もあちく今ハ勿く隠さるせぬ
 づふ坐まき糸ば爰あち御還俗あち頃て近隣の武士と招りせ
 給ひる斯有し程小足利譜代の郎從ハ諸国諸所ふ身と峙り悲歎の

泪はまげ月不恨風不憤り居りしが學慶得業江州小藝し
 おとく此項内々御方の武士と招り給ふ由と密に聞け當家
 累代の芳恩と感し斯る時節と見届け進らせ一度怨敵追討
 の旗と開け學慶公と再び天下の主と為るべ有るべと日々夜
 や々馳集り宗徒の人々ハ仁木伊賀守義廣大館治部大輔宗貞同
 伊豫守晴忠武田大膳大夫義統三淵大和守藤秀沼田勘解由左工門
 尉清延京極近江守高成上野中務大輔秀政同佐渡守信長一色治部
 少輔藤長飯河山城守信賢同肥後守忠直二階堂駿河守高秀大
 草治部少輔孝宗植嶋玄蕃允照光曾我兵庫頭とちり旧義を重
 んど馳参り御敵追討の計畧怠らざると雖も戦國の辛苦を勞ま

萬に心お任せば、勢の五百と持てる者あるまじは、是等の義勢を
 うらみ、本意を達せしめん事思ひもよむ。如何ともして然るべ
 き大名と御頼あり。大将と立ちらるべしと評議あり。若し不當矢鳴の
 城主和田伊賀守惟政、佐々木の家臣あるまじは、六角義賢、入道兼禎を
 御頼と有べしと言上る。安六角、披閑、兼禎、當國の大名とのひ故
 將軍の御代のはじめ、管領代も補せらるる。由緒もあれ、固辞
 申さん事、有べしと衆評の上、大館治部大輔宗貞と御使として
 此由頼と思召に糸仰せ下されたり。累代の郎従、佐々木と背き、國中
 一和せ、内乱し、穩あらず。まじは他國も打出、合戦ある事、
 幾と難義の折らるるまじは、御答もあらず。其年も矢島まで御越年有て

明暮天下草創の計畧、御意と苦しめ、あつ時、若狭の武田大膳大
 夫義統、歴然の御妹婿あるより、使を以て言上り、其不久、御
 座あると然るべし。當國へ御動座ありて、便宜の諸侯と召し、義兵
 の御計畧あり、と言ふ。諸卒、熊と矢嶋、小残、置給ひ、僅
 十騎、ごうの近臣と召連らる。永禄九年八月十五日の深更、小矢嶋の
 郷と忍び、出田の浦より、船を召し、若狭國へと急せ、あつ三五夜中の月
 湖水と照し、江南江北、一片の月色、殊更孤舟、小明月とのせ、尋常
 の旅行あり、御座に詠尉吟促の佳景とも成べし。今、漂泊の
 御身とあり、せあつ、昭々たる月、漂々たる波も、最まらる。浦里の
 漁火、芦間の螢火も、驚破や、敵の雲火と、誤らん。安き御心も、在まら

遠寺の鐘々落路と急ぎ漁村の鴉あつれを催し潇湘の夜雨ふ御泪
を添め生死流轉の浪上ふ哀樂浮沉の身と寄遥の秋江と凌がせ
あひく若狭の小濱ふ着給ひ懸く武田が館ふりせあふ義統慇懃
饗應奉ると之ども分國狭く勢多ううごまば此あくも天下草創の
御軍慮さふ決しあつて又々何国も移らせ給えん思召ありし所へ
江州神崎郡観音寺山の城主佐々木六角兼禎より使者と奉り去年
江州へ入御の砌家中聊不平候ひしふより態々御頼あせらまじり
共御請も耽と言上ざる條偏ふ本意ふ背け候ふ然るふ此程稍静謐
おび候ふ何ある御用とも兼て申べきあく候ふ急ぎ江南へ御動座
あつて然るべく候ふと申上りし新公方大ふ歎こむせあひ兼禎味方に

参り上り勢ふ不足もあつて此上り怨敵誅伐時日と過すと勇ませ
給ひ其年の冬再び江南ふ趣と給ふ

佐々木父子逆臣不属して主君と欺く并新公方家箕作不渡御
佐々木六角彈正大弼義賢入道とて抜関齋兼禎此程若狭小使者と
遣り新公方と招請を去程小嫡子右衛門佐義弼と御迎ふ参らせ
神崎郡観音寺の城へ入奉り警衛を奉りて嚴あじく新公方る安
堵しゆひ義兵と奉て足利家と再興せんて偏ふ佐々木の力ありと只管
頼ふ思召る仰出さるる兼禎謹んで兼て逆臣三好松永等と
誅罰つらり御上洛の義と早速ふり奉るべく心底より候ふ共此三
四年の程に國中不平うへ家臣も未だ一致とらふ至る候ふ同當

年ハ此儘御滞留候。年あつてまう候らる。早く義兵と起し責
 上り候らる。候ハ今暫し御待遊ばさ候。言上り。實
 實も今年ハ餘日も。春と然る。此小年と超せぬ。
 兼禎父子ハ原来善小遠く悪小近。奸人あり。三好の一黨ハ頼まれ
 阿波の御所義榮の御教書と以て一乗院の覺慶得業出奔あり。小
 小就て定めて還俗あり。兄君母君の仇と報じぬ。爲小義兵
 と奉ん。企てあふ。極めて大名と語ら。一方の大將とほ
 給ふ。江州ハ落行ぬ。定めて佐々木家と頼めぬ。若丸もあふ。
 油断なく謀畧と廻り討奉る。余有る。莫太の御恩賞
 と賜ふ。旨申來り。小より新公方の若州ハゆ。また事を聞出。

態と使と立ち呼迎へ。観音寺ハ入奉。不意と討んと計り
 する。姦計の程と知。召らる。危ふ。左右らる。年暮て
 永祿十年の春と迎へぬ。兼禎入道父子一向疎意あり。有る。急
 小打立。容子もあ。又兼禎も新公方と密小害。奉つ。思
 へ。流石小故將軍の御連枝なり。如何ある時節。猶豫ら。い
 一月正月も。二月小あり。都。阿波の御所將軍小成ぬ。所
 然る。御後見。故兼禎上洛。義弼管領。補。萬事
 執。あ。由御教書と以て仰下。兼禎父子ハ心せぬ。よ
 く急小新公方と討奉。謀畧小肺肝と碎。長岡大館
 一色飯河木の忠臣。近せ。ゆえ。忽の企も成。や有る。義弼思

慮とやぐら。如何も観音寺の城におつて討奉るに吾居城の箕
 作へ招請し其不意と考へ害し奉つるやと心と決り頻て御前小
 伺候しとを申す。既ふ春陽と迎へ候へども此山城も珍し氣も
 あり候ふ。御鬱散の御成ありと山櫻の匂
 無候ふ。一日花下と鄙の樽とひらけぬ。御慰も成候ふ。と
 勸め奉る。新公方御満足の由仰出さる。義弼御禮申
 上。ちと。弥明日成せらる。旨申約して退出し箕作の城の取
 て種々の手配あり。御酒宴の時害し奉らんと計り。義弼今年
 尤二歳頗る血氣の壯士。新公方。斯と。夢に。知せ給ふ。と
 春の夜の明を遅しと待せぬ。義弼が今度の催し定り興ある

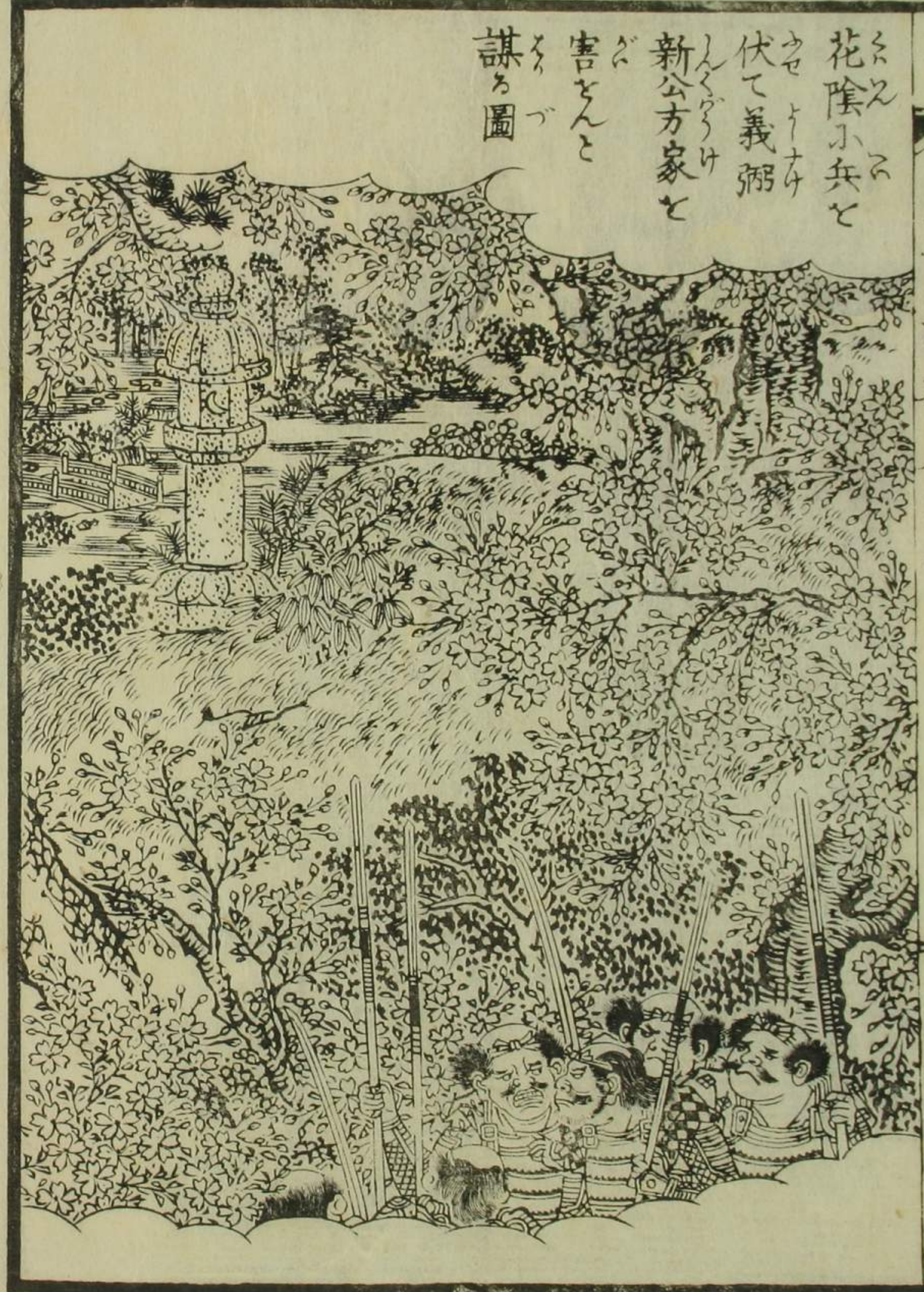
事あり。南都以来隨身給仕し。千辛万苦と凌ぎ。長
 岡三淵ホの忠臣の心。聊慰め給ふ。と思召る。既ふ夜もあけ上下
 とも御供の用意とせらる。折り。誰と。知る。終ど。今日の御遊宴
 御油断あり。と告奉る。者あり。夫の。と。此程京より使者
 来り。兼禎と閑談あり。直ふ引返せし事あり。是必ら。將軍義榮
 の使あり。新公方と謀り。口状と覺。と申す。と長岡藤
 孝聞出。此宴も。漢の高祖の鴻門の會。比。我張良とあり
 事難。雖も。樊噲。人。か。思。和。田。伊。賀。守。惟。政
 い。参。此程の始末と内々。候へ。御用心候。と
 若怪し。其御供つ。候。手。指。者。ある。ま。き。と

候ふと申せし長岡三淵をぐり力と得て斯る上の如何なる湯地鐵城
 うりとも打破すらん事難くじと勇て御供と催促せし是なり此時
 長岡藤孝年三十四和田惟政三十六歳づとも智勇兼備の良臣なり
 諸御供の面々も長岡三淵と先く大館治部大輔宗貞同大和守
 晴忠仁木伊賀守義廣上野中務大輔秀政一色式部大輔藤長曾
 我兵庫助祐乘和田伊賀守惟政等祗候し頻て觀音寺の城と御發
 駕あらく箕作の城も渡御あり此則永祿十年三月九日己の刻の夜なり
 城主右衛門佐義弼城外に出迎ひ奉り御先を立て本丸に入御は奉り
 抑御座の設け尋常より超過し善盡し美竭し心の至らぬ隈もあつた
 饗饌の數々庖丁手とてめ力を極めたり尤初に此調味の中(鮫毒と入ん

と謀りしにも新公方家近臣の面々御毒味と窺ふ者多うらん此
 復らあふくどとて是と止り此上の相伴の衆と酒宴の半小口論を仕
 出し其紛ま小殺害し奉りて決し是項莊の劍舞して沛と
 討んと成り策なり頂莊の討損しども夫の味方小項伯とて謀
 と漏せし者の有る故なり今此設の事なり所の吾居城より恰も
 籠鳥小齋より更小遁る道とていたく近臣心の猛くとも案内を
 城中なり何程の事有りと義弼心中小微笑つ先大力の打物業
 利し者と選し奥庭の築山蔭小忍むせ置花の宴や酣小及ぶ項新
 公方家微醉ふるを給ふて花蔭小御出あり其より頃合と見
 まり討く出忽ち害し奉りて下知とあり又別小劣らぬ兵士數



新公方家と



花陰小兵と
 伏て義弼
 新公方家と
 害をと
 謀る圖

新公方家と

百人小かのく得りのと携へて是も傍邊不噤し置驚破とつて一度
 小打で長岡三淵を始め大館一色飯河等及び近侍祇候の徒一個を
 漏さん討とるべし又其余の雜人原の元來鳥合の者どもあまの手に向ひ
 るべき切殺し逃る者い逃とるべしと透間もあの手配しし諸君を奉る
 とい偏小大切小あひらひ最疎意あくも見へば長岡三淵の
 人々更小心と緩めば新公方家の左右小祇候して八方小眼と配り用心
 怠りあく郷養應の品々も細吟あまの聊も召上らまば茲小誰と知れ
 新公方家の味方の衆あまの小扈從の弱冠と呼で奥庭の花の下へ遣
 いらまは扈從ども庭小下立此面彼面と見廻る小義彌と見つけ是
 の無禮あり新公方家へまて御出あまの搜小花下小徘徊あまの各々の

罪輕くぐと叱とる。其時彼命が主人宥やく云く公宜ある貴庭
 の花の色尋常又勝とるれを尚極やく見所あると蔭小立中をい
 ろが一入小興も候とんと存じらにより何まの邊り殊小色深く人見て
 参まて申つと申候ひありと言ふ小連て新公方家も如何なる花下
 小圓居せば是又野山の春の景色の心地を主人の心と籠らば花も
 取つけ面白くくむと程よく御詞とあるを給ふむと小義彌も心解と
 何さぬ中さき御意ある某は扈從等が不覺歩と存候あまの禁免
 候ふなり。花下の宜く人所と見立いと許せらる小性ども
 心の儘小花の蔭隈あく見あると中不竹丸とる扈從今年十五
 歳心利する者あるは能々見よと。夫より桑山の陰小ゆ紀亦山小登り

四方と窺ひくるふ果しく義弼がエも兵士等唯今築山の後忍び
 人体と篤と見届け頃て座敷小立飯つく主人小言を申し心と盡さ
 まし許多の名木あるに殊更小花の匂ひ深く覺へ候ふ就中あま
 見へ候ふ築山の陰に取つけ見所多く見へ候ふ上様もかゝる御座と
 移さる花の女映と御覽せしめと哉と言えん其主人や其語と
 察し何さぬ夫へ御慰も増へ候ふと勧め奉る詞不属て義弼ハ能
 首尾ありと笑壺ふりう築山ハ御成ふよりと俄小設けし山あまむ
 差する景色も候ふと存じを斯も愛せ給ふと不圖よりふふ
 社候へ然に多く彼所へ渡らせあめと鄙氣ら芝生の花莖も又奇
 らしくや御覽ごま今日の面目も小過ごと義弼も酔ぢらり

悦び狂く御先小立庭小下立その時新公方家も御座と立せし
 御樋小あせ給ふと御小性竹丸と召て事の容子を聞召りて
 覺悟し給ひとあま今更小驚りせぬ御氣色もあ義弼もどに
 計りてんが築山の後のと有るに此城中きて我と討て結構あ
 一儲の道まん路わじ整小遊まひ死耻とかんる吾家の取瑾あり
 但運小任さんより外別小術も非ごとく思ひ定め御座る
 和田長岡主君と助け湖上と渡る并義弼謀畧の齟齬と怒る
 かる處へ長岡藤孝まより出斯あんな推量まより去あて手と束ねて
 死を待た思慮あも業あり其此方彼方と見ゆら候ふ小搦手の塀の
 外岸嶮く岨ち候ふゆえ用心の体も見へ候ふ此所より御忍び中に

道まを給ふ。夫を始終の運と様とせあふ占と候ふ。和四伊賀
守と諺ひ置て候へば彼處の塀の外へ惟政御迎ひ奉る候之。
速より御出あふ。但御衣と御樋殿の扉小打かけ置御樋小ま
まを休ふりて。愚臣の饗堂の首尾と取繕ひて後中追付奉る
御と言つ藤孝の饗堂に立久。上様より稍て花下へ渡御あふ。
面々その支度つとさきと。近臣の衆と催し立ち其間小新公方家
ハ虎の尾と踏せぬ御心地。あが後門の方へ紛れ出さぬ。諸
亦饗堂より長岡三淵あんど只管あめと取らる。新公方家御
樋より御出あふ。問ふ御座の敷設あぞ早く取らる候へ。夫
へそ立ると。義弼心得て築山の下小御座と設け種々の饗食具

持とび御出遅し。待侘々藤孝義弼不言とや。上様より常々御
樋小あふ。まを餘程の御隙つと給ふが例も。今日つらも
より長くわらゆる也。罷越て伺ひ奉るべし。饗堂と立ち御
樋殿小行あり。直小搦手へ廻り三淵大和守藤秀と共に。観音
寺山へ御使小参る。申断りて門とつ。岨路と傳ひて辿り行け。
遙く遠く新公方家と伊賀守が宿員まのせて。飛が如く。越智川
小添ふ。走ると見らる。藤孝嬉しく足と空と追付奉り御運
めぐたく御座ま。瑞相とや頭と候ふ。斯く必と御本意と遂と
給ふ。悦びつ。只管より。湖水の端と心ざ。落さぬ。小蘆
葦繁まる。浮洲の陰小海士の小舟の僅小見ゆ。頼る。前後も分

ど急がせぬ。此時築山の花の本より義弼の心入りて新公方家と饗
應たてまつらんと種々御興あし事と設け御樂ふ打解あし折と
窺ひ討取奉らんと兵士と牒ト合せり御成おとと待程ふいまで御出
ましの容子もな。長岡御伺ひよ参りても余程の間あり何事うあ
まを窺ふと参りて再び使と参らせり小其使走りて新
公方家いまで御樋ふまひとや御衣の懸拵かたり候ふ借長岡の
御用ふつとて観音寺山へ参り候ふ由りて後手の御門と出らとと義
候ふと申あぞ義弼あはく不審と幾ど待遠くく自ら御迎ひ小
参上り御樋の傍と見まのりて如何なる御衣を其ま懸りて去
りても程久し能く窺ひ奉りて小性もと呼出し尋ぬる小彼竹丸

申るの上様より義弼のあつと饗應ふ不慮盃の數と重し例より酔
とせらまるとて風ふ向らせり酔と醒させめりて強く酔せめり
見へ御胸苦しとて暫時目睡ませめりて又りや花下小成せらとる
倍酔つと有らせりまんとて密に観音寺山へ還りて義弼の尋り
めん時ふ申せと仰あは若亦主人の尋ね申とあはるん更ふ言とふ
及むるの上意候ふと申せり。義弼大憤り種々心と盡せり唯
新公方家と饗應奉らん爲り然る小還御ありとめりて誰と賓客
と宴と催さん哉借彼隨從の人々の如何と見ると長岡三淵を先り
観音寺山へ行り由其余大館仁木一色と始めをて三十余人の近臣
と行くや更ふ一個も有りて義弼のユ事ども齟齬と

月夜小金の拍子と抜し。今いふや、観音寺山の御旅館へ入御ありつらん。追駈奉るも其甲斐有へく。此上の父兼禎と談ひ合ひて討奉る。之うさるも斯謀略の裏とかり、事い正しく味方内通せし者の有ふ決せり。知て難し。此頃の人心あり。今草子も木も心許し。しとて黙然として有る處へ郎等一個く。飯をて言せし仰ふ隨ひ観音寺山の御旅館へ参り容子と伺ひ候ふ未だ還御せし。まゝに趣き御留主の者の申て候ふ途中も其方此方尋候ふ。今朝どの御成を拜と奉るも還御の程い更ふ存せんと申いと告るも義弼よく怒り是一朝の事あり。いと歎息つて詞か。又観音寺の城中い父兼禎入道今日の首尾いりやと思ひ煩

不折り小箕作の城より使馳来り。新公方家酒宴半小何も仰せし事なく御歸館ましく候ふと告る。兼禎入道あは驚き當御旅館への還御の御沙汰更あは如何ある事やと疑念幾と晴る所不御前伺ひの諸侍追々立歸り還御のより申る。兼禎心中小危を其子細と尋ぬ。小其趣意と知者。其内小誰とあり箕作その隱謀と知り有て新公方家と竊に落し参らせ成べしと噂せし所へ義弼来りて兼禎小對面し今日の一五二十と語り。儲の若狭へ落らるる。彼所隣国あるは是より追討の軍兵と差向ん事安し。小似し。其道江北と通行せん。叶せん。江北より新公方家一味の者も多し。我一手中軍勢と差向し。先京都へ注進



石川軍記 卷之二

三好方より攻る様小計ふへしとて直小飛脚と馳て此始末と通達せし
ども不道の輩奢侈小月日を送り榮華小誇りて此注進と事をも
せど侮輕んじて討手の沙汰も有らざるを就中岩成主税助の智勇
小秀で武士あまは此捨つこと大事なり急ご討手と差向へしと只
一個つららしむる長評議小日と経るや小松永彈正久秀三好修
理大夫義繼信貴山多門山の兩城小楯籠り三人衆と討んと結構
也新公方家討手の沙汰と止め先松永と退治して後若狭小軍勢と
向へしとて俄小軍の用意とほ又同士軍と始めらる故小新公方家と討
取ると穿議へ更小なうらる茲小亦新公方家の先小箕作の搦手と遁ま
ぬ和伊賀守長岡兵部大輔三淵大和守小助けらる越智川と西へ

流ま小添て下らせのひらる小蘆葦の茂る小舟と見つる是を
僥倖の助け船ありと言まると乗移らんとあつ所小船中より一個の海士あり
これ出是れ誰とく渡らせあつと問ふ和田のくつと隠し直せは悪うるべし
若敵の余類ありた立ちとら討果えんと身がまへつと汝もさる是れ
稍と征夷大將軍ありとせあ御方ありと因より儲いと心得つ疾御船
に召させ給へと掉に寄て畏まる惟政藤孝藤秀小新公方家と傳き
て御船に乘まると跡より追手が返り疾を出入江北の方へ着参らせと
急がれ所へ誰れ四個をうり追りけらる敵味方不審と暫時たやふ
折らるに夜の亥の刻と更らるる亥中の月のさし昇る小近づく者と佐と見
ゆき小豈料らん長岡三淵が恩顧の良等御後と慕へるなり船より主人声

とくまべ陸より良等聲と合ちつりそきて船小乗らうまは船長心得
 出も浪風最も謚あま六里なるの湖上と僅の間小漕まら其曉
 天小恙み三尾が崎へ着ぬ此所近江国高島郡ありて朽木宮内大
 輔貞綱が領地ありしが長岡三淵の兩人と御使うく頼ませぬ由と仰
 出さるる貞綱異儀あり兼て奉て頼ま子河内守元綱と御迎ひ小
 奉る此貞綱の佐々木六角一族ありて享禄天文年間より萬松院義晴公
 京都の乱と避ありて此朽木谷へ入御ありし時貞綱の父民部少輔植綱
 二心あり守護し奉て忠誠と盡せし家ありしに疎意ありて思召し
 あひく頼ませぬ所あり借りて早速御迎ひと参りしと累世の忠臣と深く
 悦びせぬは斯と関をふりけ近従伺ふの面々追ふ参上朽木谷を集り

大館一色の両臣越前小使と並門徒一揆朝倉と挑戦

近江国朽木谷と名のり高鳴川の水上より山深く道険しく要害最
 めりく人雖も山懐くそ地方狭く何事の計畧も為る所あり一
 先若明一御動座ありて諸国へ御教書と下りて天下草創の御方便を
 廻らさし然れども一統評議の上言上り小新公方家の朽木父子小對し此條
 あり有りと御尋ね有る朽木貞綱申上るや衆議の如く此所小潜て
 御座候まらぬ何まじ居らせ給ふも御勞神あり久も山谿の切
 所より多勢の集會思ふ任とん大義の御企とらざる難義小候ふ
 べし若狹も分内狭くして全く御本意と違せらるる地方小あり天晴
 越前国の朝倉大身より勢多し當時左衛門督義景の内室の武田

義統の従弟女小候ふ上故將軍の御時管領細川晴元の婿となり。
 光源院殿義輝の御一字と賜り義景と改め候ふ程の御親も久々義
 統より仰下さるる朝倉異儀不及事候ふまじと言ふを實雨り
 と一統さるる決定し同年四月下旬若州へ御動座ありて武田大膳大夫
 義統が居城へ入御まじく長岡三淵と以て若狭へ御移すのはと觸れ
 しが大館一色仁木上野沼田曾我飯河二階堂能勢植嶋が徒我も
 くと群参し若州俄小賑ひ多。斯て城主義統と召ま越前の朝倉
 と頼もあが如何わんと御尋ね有るる義統畏つて彼義景の迎親を
 候へども彼大身某の小身より自ら合期し日頃疎遠小打遇之
 ども夫い家中の私事是れ公儀の御大直小候へ御使と以て仰出され

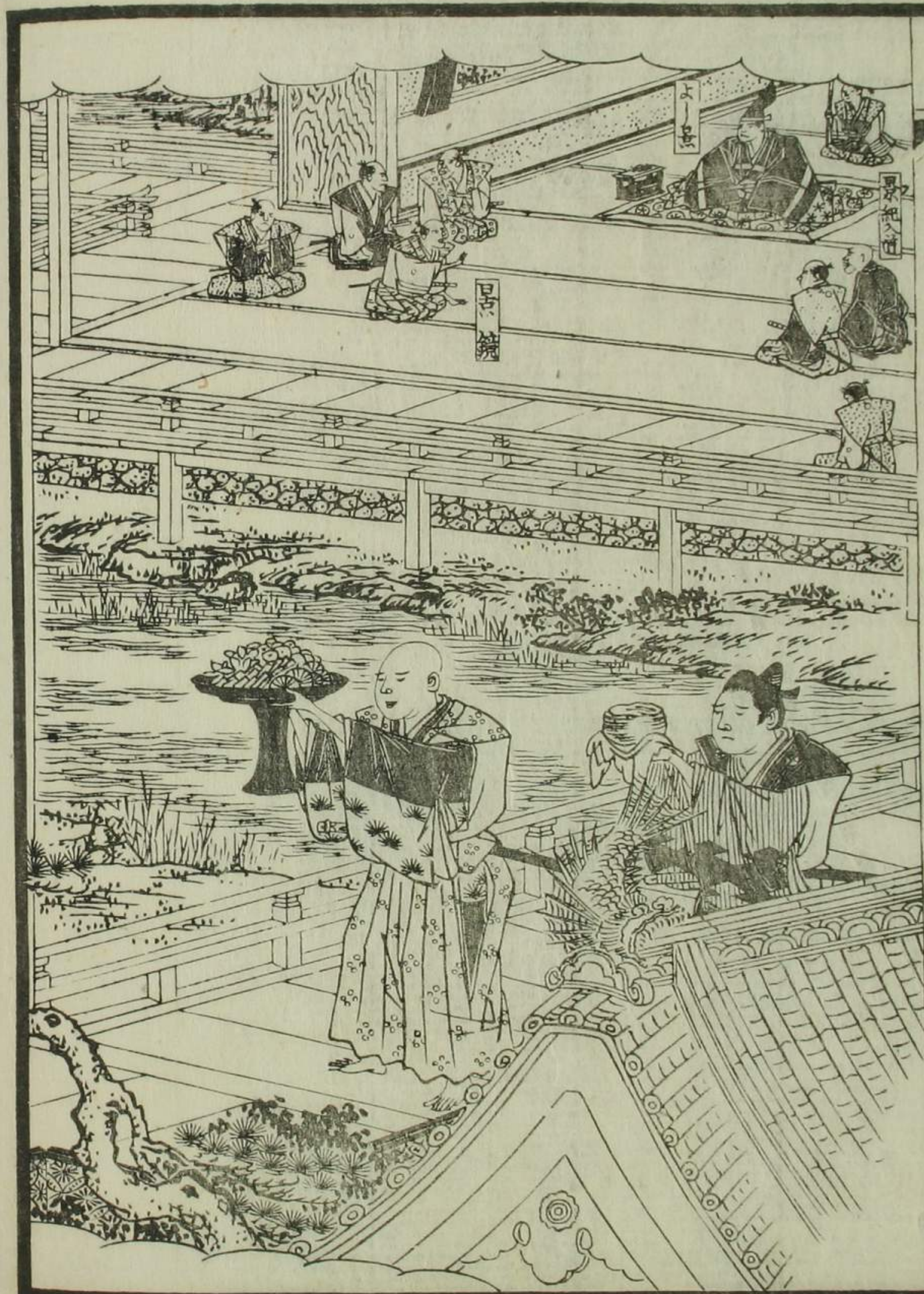
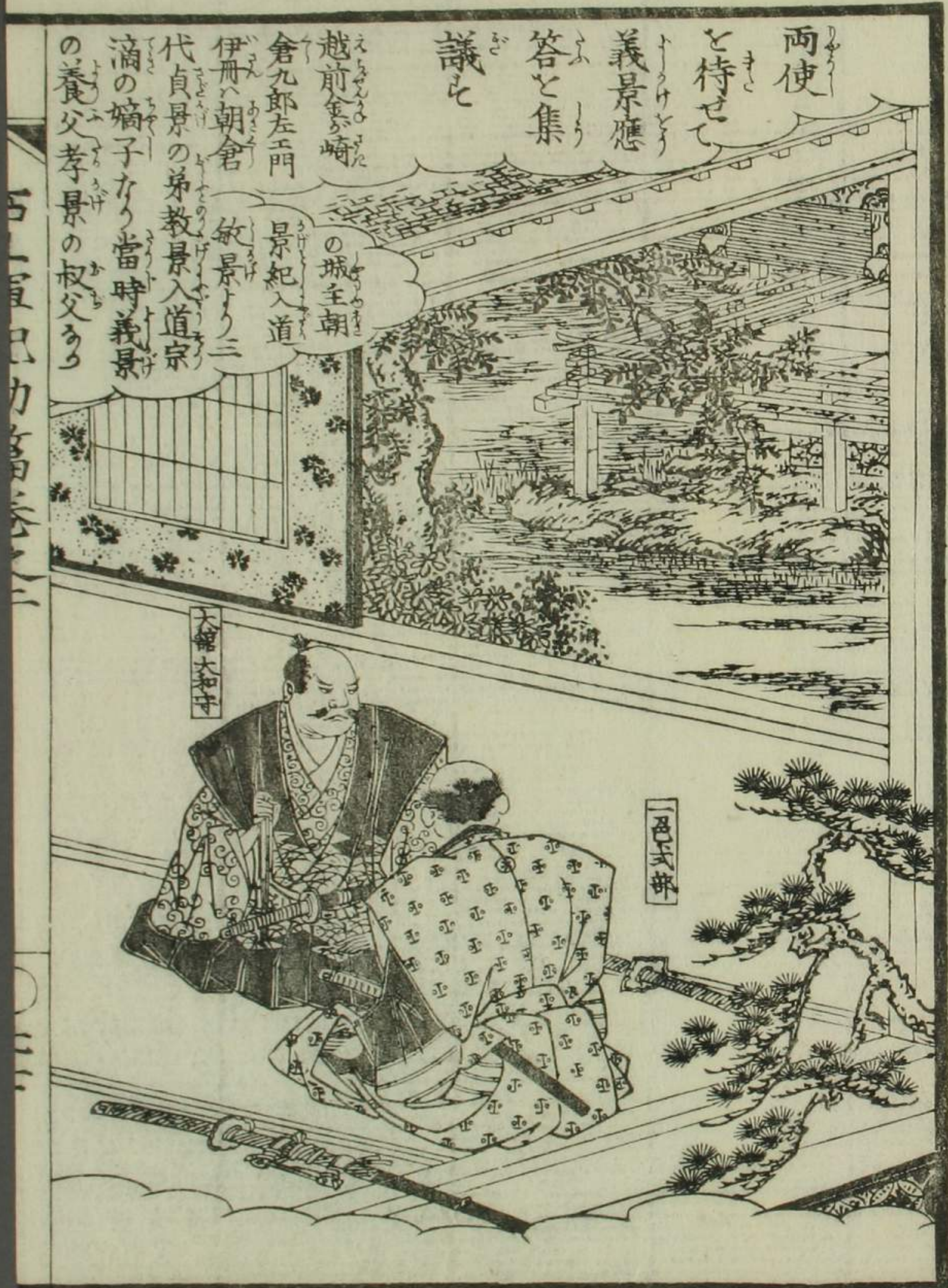
こんふ何の子細り候ふと云上るふ。御使と出し互らふて大
 館大和守晴忠一色式部大輔藤長の両臣して越前國へ下され
 越前國大野郡一乗谷の城主朝倉九衛門督義景と之を其母系
 と尋めりふ入王三十七代孝徳天皇第二の皇子有間皇子の嫡男表米
 の王始やく日下部姓を賜りしより以降子孫相續て但馬國朝來
 郡朝倉郷の領主ありしが鎌倉の北条天下の權と執し頃ハ漸小
 家衰へて武名も世小埋りたり。然る元弘年間後醍醐天皇北條
 相摸入道崇鑑が積悪と惡まを東征と思召立せ給ふ是れ依
 て天下大乱を足利尊氏天皇志と通し六波羅と亡びんが爲
 小丹波國篠村小着陣ありて山陰山陽兩道の勢と催し集めれ

時先祖朝倉孫右衛門尉廣景但馬國より早速小馳参りける
 尊氏其忠功と喜びぬ足利尾張守高経の手小属する高経
 足利家宗徒の一族より斯波修理大夫と称し後入道して道朝と
 号し其子孫尾張の武衛と申す然るも新田左中將義貞越前
 不向の後尾張守高経義貞と討取し其恩賞として越前国と
 賜り守護職を任じ此時朝倉孫右衛門尉廣景累世の武功あり
 因て高経と賞美し越前国足羽郡黒丸の城と與へる廣景武
 勇不達せざるが故に數回勲功と抽んで終に斯波家の執事職となり
 威と國中不振いなり其子孫四郎正景父より武功の勇士あり
 將軍尊氏卿より高の字と賜り遠江守高景と号し二代將軍

義詮卿の治世に斯波尾張守高経の子治部大輔義將と京都の
 管領職を任じ給ふ其後貞治年中に義詮卿より朝倉高景を七
 箇所の采地と賜り永く斯波家の後見補佐の臣と定めぬ斯波
 義將より數代京都の管領職より然るも足利八代の公方義政との
 治世に正年中に斯波の世嗣あり家既不斷絶不及んぬ其時家臣
 二小別と一族大野義敏と淡川義廣と養子と家督せりて相
 争ひ合戦して天下動乱不及ふ世に是と武衛騷動と号し朝倉甲
 斐織田の斯波武衛家の三老臣より然るも甲斐左近源昌之不義小
 して主人斯波家と逐て越前と奪へる其頃朝倉彈正左衛門尉
 敏景とて武勇絶倫の猛將ありけり忽ち小義旗と舉て甲斐源昌と

亡し越前二国と切從へ威と隣国不振ひるるが。應仁の大乱の時細川
の陣ふ加まり數度の軍功と顕るるあり東山殿より越前の守
護職と恩補あり。御教書と下賜し陪臣の列と去る。諸侯の列ふ
加へらるる。敏景武威益盛んありて終ふ斯波家と押倒し。中
國中と治むる。不承道の事あり。程ふ武衛の家臣も此時過半朝倉
不伏從せり。敏景後剃髪して英材寺入道と号し。又大野郡一乘谷
又居城と築こゝちと以て一國の本城とあり。文明十三年七月廿六日終
に卒む。其子左衛門佐氏景其嫡子彈正左衛門貞景其子孝景十九
歳ありて家督。叔父左衛門尉入道宗滴後見せり。孝景若狹の武田
大膳大夫元光の息女と迎へて妻とん。孝景男子あり。一は

江州の佐々木近江守氏綱の末子と養て子と。孫次郎信景といふ。
十六歳ありて家督。時の管領細川晴元の婿とあり。義輝將軍の
御一字と賜り。左衛門督義景と改む。年齢今年永祿十丁卯三十五歳
あり。とぞ其生質養父實父又似ど。武道小疎く狐疑の心多し。と
ども代々の名家といひ家臣又武勇の士多し。北陸道の旗頭と
て我國とて持るる。武威と隣国小輝りせり。又織田家へ代々斯波義
將の子孫と主君と仰ぎ。尾州清洲の城小立置其身。執權として
尾州の乱と斷鎮め。信長の時ふりて。猶其形と残さる。故小
織田家より朝倉と逆臣家かりと嘲り。又朝倉より織田と陪
臣たりと侮り。文明永祿小至つ。両家確執止むる。



初上言初集卷三
 六

去程小大館一色の両臣の越前国小趣き。朝倉の本城大野郡一乘谷
 小到り足利新公方家の御使々々両臣まうり越より告るれ城主左衛
 門督義景速小是と迎へて對面と時小大館一色の上意の趣と將軍家
 再興の義と頼まきしと義景謹んで兼りまうり兩使と客殿小請一餐
 應なり其内小一族老臣の輩と呼集め此儀へくと評定あり小當家の
 長臣魚住備後守進と出て申さる。前將軍の御條誰しも三好松永が
 悪逆と惡し憤らる者ありと之をも面々自国の取合小隙あり殊しく
 私小兵と發し攻登る事も如何と斟酌して延引小及ぶ所あり然る小前
 將軍の御舎弟南都一乘院の覺慶得業御還俗ましく三好松永と
 誅し怨敵と滅しゆん爲小義兵の御旌と舉るを給ふより誰れ背

き奉るごと。早く當方も一味合体あり御本意と遂に奉る名
 譽天下小く是れ弓矢とる身の面目と申さる。別て屋形前將軍
 の御一字と賜り御事あり御味方あり處あり然
 らば何の思慮も及び申さ急き御請有て然るくと申さる。一族
 當国金崎の城主朝倉九郎左衛門景紀入道伊冊とて同て實
 魚任の申さる。如く新公方家より御頼り小預り武士の譽れり。
 御兼知あり然るに去あ。先新公方家と當国へ御動座なり
 奉るも余り後御計畧と廻らると候あべと勸めると其一族家
 人の徒もか是小同らる程小義景も心と決り然るに御迎ひを奉る
 ると大館一色と對して言さる。上意の趣と畏入候ふ去あ。若

狭国小御座りく大義の計策なり候ふ一先越前へ御移り有
 て余之候ふ頃て御迎ひと奉るべしと答りしに二使大不歡
 ひ勇も若州へ馳歸り義景を御請の條に御勅座と請奉るは言
 上せしに新公方家御満足ふ思召。之れを越前へ渡御あるはとて
 御用意専らある所へ越前より御迎へて一族朝倉孫八郎景鏡五
 百余人と召具して参上を新公方家喜悅のめなむ。同年九月朔
 若州と立せぬ。越前國敦賀郡小入らに給ふ義景を以て九郎左衛門
 入道伊冊あり。嫡子中務少輔景恒と。郷養應の役人となり。故
 伊冊入道父子國境まで御出迎を奉り。金ヶ崎の城へは奉る。景
 鏡ハ此度ハ御迎参上。路次の警固神妙なりと仰出。是式部大輔

にありしに義景より朝倉出雲守を以て使者と。金ヶ崎小来ら
 し。御着と賀し奉る。景紀入道日々善美を盡し御郷養のり。鹿
 略なく執りし。と雖も新公方家より一日も御旗を奉らんと
 と而已思し召て偏小心と焦燥あり然る。此頃朝倉累代の旗下あり
 當国坂片郡本庄の城主小堀江七郎景忠と。武勇名譽の良臣
 あり。義景小諛言あり者あり。君臣の間不和となり。景忠を
 く。義景と怨み終ふ。本庄の城小楯籠り謀反の企あり。義景討
 手と指向日と堀江と合戦數度。及ぶ。然る。小景忠無勢ありて戦ひ
 利あり。敗北して越前を遁去り。加賀國小落行し。其頃加賀能登
 の兩國。都て本願寺の領知あり。門徒一揆の勢ハ強く隣國ニ威

と震ふの折りありふより一揆の徒黨堀江七郎が武勇と感し景忠と
 大將小取立越前国小乱入せんと軍勢催促専らなりし程小義景も
 と征伐せんと出陣せざりて有て加越の騷動大なるあり是に依て京都
 發向も自ら延引み及べし新公方家も此取合と察しあひて暫く見合
 せ給ひが其争戦り果づくとも量りたりしが長岡藤孝もとと察し
 加越兩國和睦の儀と御計ひ然るし新公方家へ勧め奉り谷内へ
 義景へ仰下さりと雖も義景許容せざりしが一乗が谷へ入御
 あつて調談ありとて同年十一月廿二日金ヶ崎と御立あつて一乗
 が谷へ成らせらる義景此由と兼て朝倉式部大輔景鏡前波藤右
 衛門尉景定と御迎ふ出一乗が谷安養寺と以て御旅館と奉る

余後義景御禮して出仕あり其行粧京都全盛の時分管領の儀式を
 先式部大輔景鏡烏帽子直垂と威儀と取らひ参上と是に
 御案内の爲り暫く有て義景装束正しく出立し騎馬三人相具せり
 其輩あり朝倉出雲守前波藤右衛門尉山崎長門守ととも烏帽
 子素襖と着て其形勢諸人の耳目と驚らせり御前小於て三献の
 御祝儀あり御相伴あり仁木伊賀守義廣参上せり式部大輔景鏡
 御掾小伺候せりその後兩國和睦の儀と仰下さり處小義景異儀
 及ぶ早速御意小從ひ奉るべし由御請申上りふより新公方家
 大小悦び給ひ即時に加州へ御使と立ちて天下静謐の爲なり速に
 和睦して兩國太平と致さる候と懇々仰らせり程小門徒の一揆

等も上意固辞（ト申上意固辞）がごとく。互ひに和睦相調（互ひに和睦相調）ひて。同十二月十五日加
 賀（賀）小有（小）とらの一揆方の兩城柏野杉山と放火し又越前方の黒
 谷檜屋大聖寺の三城とも放火せし。是より兩國無異は隔（隔）北陸の
 往還自由と得（往還自由と得）し。去程小新公方家御上洛の御催し有（御催し有）り
 ありとも。既（既）小寒氣を迎へ北越の風よく雪深く中々軍勢の進退
 ちる小任（小任）せど故小明年春暖ふなりて雪消るを待（待）てあひさふ
 是よりして安養寺と以て御旅館とて此小任（小任）せ給ふとなり

繪本石山軍記初篇卷之二終

